

令和6年度 年度末自己評価書

愛南町立平城小学校

【評価基準】 A:目標を達成 B:8割以上達成 C:6割以上達成 D:6割未満

1 正しい子

重点目標	評価指標及び目標値(期待される姿)	評価	考察(◇)及び改善方策(◆)	評価資料	アンケート結果				
					肯定割合	4	3	2	1
あいさつができる子を育てる。	指標① 進んであいさつをしているか。 目標値 児童・保護者・地域住民・教職員の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	◇児童の肯定割合は90%を超え、4(とてもできている)の選択が50%を超えている。しかし、家庭・地域・教職員ともに肯定割合は80%程度となっている。児童集会や代表委員会、スマイルあいさつデーなどで、児童会が中心になって挨拶運動に取り組んだが、全校的な取組には至っておらず成果につながっていないと考える。 ◆児童会活動を中心に挨拶運動を継続する。校内だけでなく、家庭や地域で挨拶に取り組めるよう、児童と話し合いながら改善策を考える。また、具体的な守り方については、学校だよりで紹介するなど保護者にも伝え、共通認識のもと家庭と連携して取り組んでいく。	児童アンケート① 91 53 38 7 2 保護者アンケート① 82 25 57 17 1 地域住民アンケート① 86 14 72 14 0 教職員アンケート① 89 6 83 11 0					
		年度末	◇児童会が提案した挨拶運動が始まる前にアンケートを実施したため、中間期より低下傾向にある。特に、教職員の肯定割合は72%と低く、挨拶の習慣化の確立には至っていない。現在、児童会を中心に挨拶運動が始まり、元気のよい声が聞こえるようになってきたが、一過性に終わることが予想される。 ◆児童会主催の挨拶運動を継続し、全教職員が一丸となって繰り返し指導しているところである。引き続き、周りの大人から働き掛けていく。また3学期は、登校班長が新しく交代されることから、地区別児童会や登校班長会を実施し、リーダーの指導を行うことで登下校中の地域での挨拶の変容を図りたい。	児童アンケート① 88 46 42 10 2 保護者アンケート① 80 27 53 18 2 地域住民アンケート① 90 45 45 10 0 教職員アンケート① 72 10 62 28 0					
返事ができる子を育てる。	指標② 返事がしっかりとできているか。 目標値 児童・教職員の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	◇全校集会や学級などで機会を捉えて返事の指導を行ってきたが、肯定割合80%以上でB判定である。昨年度と比べて「まあまあできている」のポイントに大きな変化はないが「よくできている」のポイントが大きく下降している。教職員のポイントが、昨年度と同じであり、今後の取組で年度末にポイントが大きく上昇する可能性もある。 ◆学校生活の中の様々な場面で問い返し、理解が伴う返事であることを確認していく。「もっと大きな声で返事をしたい」と考えている児童もおり、継続的に教職員や児童会が働き掛けることで、「あまりできていない」と答えている児童が自覚して行くことが期待できる。	児童アンケート② 85 38 47 13 2 教職員アンケート② 83 6 78 16 0					
		年度末	◇中間期とほぼ同じく、肯定割合80%以上でB判定である。中間期と比べて教職員のポイントが若干上昇しているがその分児童のポイントが下降している。「しっかりと」とした返事の認識が教職員と児童でずれが生じていると言える。また、正しい返事の仕方を意識させたことが、児童の自己評価の低下につながっていることも考えられる。 ◆大きな声で返事ができる児童も少なくない。正しく返事ができる児童を賞賛したり、全体の場で紹介したりするなど、学校生活全体を通して、返事の指導を継続していく。返事の改善により、挨拶も向上していくと見込めるので、根気強く取り組んでいく。	児童アンケート② 82 31 51 17 1 教職員アンケート② 86 10 76 14 0					
学校関係者評価委員の意見	挨拶は環境づくりが重要である。意義や意味をきちんと理解して挨拶ができているかという点に力を入れ、指導に当たってほしい。また、声の大きさを問うのではなく、意思表示ができることが重要である。そう考えると、挨拶よりも返事の指導に重点を置くことが挨拶の改善につながるのではないかと。話を聞いてうなづいていることや目を向けていることなどを認めることで、返事も改善されるのではないかと。ぜひ継続的に取り組んでほしい。 新型コロナウイルス感染症の流行から、全体的に挨拶は弱くなっている気がする。集団では挨拶ができるが、個別になると難しいようだ。朝の挨拶はそうでもないが、下校時の挨拶は清々しく、学校での活動が充実していたと思われる。挨拶は幼児教育からの取組が必要で、学校だけで身に付くものではない。アンケートの結果を子どもに知らせ、指標を示すこともよいのではないかと。	学校の対応	全校集会や学級活動、道徳科などで、挨拶の意義や目的を再確認する。1学期は児童会を中心によりよい挨拶について考えてきた。大きな声で挨拶をすることよりも、気持ちのこもった意思表示ができるよう、継続して粘り強く取り組んでいく。 返事については、まず目を向け、話を聞くことから始める。反射的に返事をさせるのではなく、きちんと話の内容を理解させることがよい返事につながる。話を聞いている児童を認めることで、よりよい返事につなげていく。 挨拶を定着させるには根気が必要である。児童会や教職員が気持ちを切らすことのないように継続した取組を実施する。また、返事は学習訓練の基本である。日常の授業の中で返事を大切にすることが、学習面の伸びにつながる。賞賛や指導を繰り返しながら、挨拶と同様に継続的な取組を実施する。また、目標値や達成率児童に見えるようにするなどして指標を知らせ、目的意識を持って挨拶や返事を改善できる児童を育てたい。						

2 考える子

確かな学力の定着と向上に努める。	指標③ 授業が分かっているか。 目標値 児童・教職員の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	A	◇児童95%、教職員94%がA判定である。しかし、児童の約半数が「よくできている」と回答している一方で、「よくできている」と回答した教職員は約1割であった。また、学習内容の理解や定着の個人差は、今年度も課題として取り組んでいるところである。 ◆引き続き、学力向上推進の取組の一つとして、ICTを活用した学習内容の定着の確認に取り組む。また、個別最適な学びを目指し、習熟度別やコース別学習を取り入れて児童の実態に応じた指導を行い、児童の主体的な学びにつなげられるようにしていく。	児童アンケート③	95	48	47	4	1	
		年度末	A	◇児童95%、教職員100%が肯定しておりA判定である。ICTを活用して児童の理解度の把握に努めたり、補充学習を行って個々の学力の定着を図ったりしたことが、教職員の肯定率の伸びにつながったと考えられる。しかし児童の5%は「あまりよくわからない」「わからない」と回答している。 ◆引き続き個の実態把握とそれに応じた指導に努める。3学期は放課後の活動が少なくなるため、比較的放課後の補充学習が実施しやすい。「あまりよくわからない」、「わからない」児童への対応や指導に努める。	児童アンケート③	95	52	43	4	1	
	指標④ 授業でICTを積極的に活用しているか。 目標値 児童・教職員の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	A	◇児童の96%、教職員は100%が肯定しており、授業の中でICTを積極的に活用していると言える。児童に2の評価が3%、1の評価が1%あり、教職員の0%の評価に対しズレがある。それが児童の発達段階によるものか、個人の問題によるものかなど原因を究明する必要がある。 ◆学力向上推進の取組でもある「深い学びにつながる対話」を中心とした授業を展開し、ICTを教材の提示だけでなく、次時の導入や学習の見通し、家庭学習にもつなげることができる活用に努める。	児童アンケート④	96	72	24	3	1	
		年度末	A	◇児童89%、教職員95%が肯定しており、授業におけるICTの活用が定着してきたと言える。一方で、できていないと回答した児童がいたが、「アンケート実施日前後にタブレットを使わなかった日があったこと」、「家庭での使用だと思って回答してしまった」ということが分かった。教職員はICTを活用して授業を行っているが、児童自身がICTを使わない場合に、意識のずれが生じている。 ◆ICTを教材提示機能だけでなく、話し合いや練り合いの場面で児童も積極的に活用できるようにするなど、深い学びにつながる授業づくりに努める。	児童アンケート④	89	40	49	10	1	
	指標⑤ 家庭学習を毎日15分×(学年)以上しているか。 目標値 児童・保護者の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	B	◇児童、保護者の約80%が肯定しておりB判定である。そのうち児童の約半数が、「決まった時間、家で勉強している」と答えている。保護者の回答からは、児童はほぼ毎日家庭学習をしているが、その内容や取り組み方には課題が見られるようである。 ◆今年度は、個に応じた課題や宿題の配信に取り組んでいる。ICTによる配信の実施は30%ほどであったが、ICTに限定しなければ、全員が実施することができた。ICTを活用した課題や宿題の配信の仕方を工夫するとともに、これまでの取組を今後も継続し、発達段階に応じた学習習慣の定着を図りたい。	児童アンケート⑦	80	46	34	16	4	
		年度末	C	◇児童23%、保護者18%ができていないと回答し、C判定となった。傾向としては、学年が上がるにつれ目標時間を達成することが難しくなっている。2学期は学校行事も多く、放課後の活動や習い事、社会体育などで、家庭学習の時間が確保できなかったことが考えられる。しかし、すすくカードからは、ゲームや動画視聴などに時間を費やしていることも大きな要因であることが分かっている。 ◆ICTを活用した課題配信とそれ以外の宿題や読書で、家庭学習の目標時間に応じた適切な量を課題していく。また、学校だより等に家庭学習の習慣化についての項目を掲載し、保護者との連携をより強化し、学習習慣の定着を図る。	児童アンケート⑦	77	43	34	19	4	
	指標⑥ 週に3回は家庭読書をしているか。 目標値 児童・保護者の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	D	◇学校では、読書をする機会や関心を高める活動をしており、読書が嫌いで肯定率が低い訳ではないと思われる。しかし、家庭での読書をする習慣は個人差が大きい。児童が家庭で過ごす時間が短かったり、保護者が読書をしているのを見る機会が少なかったりする家庭もあるため、肯定率が低くなっていると考えられる。 ◆本の福袋への関心が高いため、低学年を中心に親子読書にも活用する。全校的には、週単位や月単位で目標を設定し、週末の宿題の欄に「読書」と記載する。また、購入してほしい本のアンケートを実施し、児童が読みたい本を図書館に整備していく。	児童アンケート⑧	64	27	37	24	12	
		年度末	D	◇学校では、本の福袋の活用や週末の宿題としての「読書」、読書週間を活用したりして読書の習慣化に努めたものの、家庭で読書をする児童にあまり変化はなかった。読書週間中の調査を見ると、全校の平均読書時間は1日当たり16分で、週に3回以上読んでいる児童の割合は8割を超える計算になっていた。児童が家庭で過ごす時間の確保や、保護者が読書をしている姿を見る機会を増やすことは難しいが、意識的に読書に対する取組を行うことで、読書の習慣化につながると考えられる。 ◆本の福袋や宿題としての読書、児童が希望する図書の整備を継続する。また、親子読書の取組に保護者からの肯定的な評価が多かったため今後も実施する。さらに、学級や全校での目標や達成度を目に見えるように掲示して全体の意識を高めていく。	児童アンケート⑧	65	27	38	27	8	
	学校関係者評価委員の意見	学校での学習を理解している児童が多うれしく思う。分かる・できる喜びや課題解決の楽しさを感じられるよう取り組んでほしい。また、家庭学習で目標値を超えていることもよい傾向にある。宿題だけでなく、興味のあることや調べたいこと、読書なども含めて取り組んでほしい。ICTの活用については、「絵を描く」「ドキュメントを作る」など、ソフトの操作やファイルの管理など、今以上に踏み込んだ学習も必要である。 読書の習慣化はすぐに身に付くものではないが、いろいろな仕掛けができる。漫画や県立図書館の本も活用し、読んでよかったと思える児童や、本の世界に浸れる児童を育ててほしい。また、近隣の公共施設や地域の方も巻き込み、読書の習慣化に向けて取り組んでほしい。			学校の対応	日常の学習については、引き続き個別最適な学習を目指して、児童の実態に応じた取組を推進していく。家庭学習についても、宿題のみに限らず児童の主体性を生かしよりよい学習となるよう、発展的な学習や読書等を取り入れる。 ICTの活用については、アプリ機能を最大限生かす方策について研究・活用に努め、発達段階に応じた取組を推進していく。 読書の習慣化は、昨年度評価が低かったために、保護者に対する質問事項を変更してアンケートを実施した。回数を決めたことで、保護者が評価しやすいと考えたためである。しかし、回数を決めたことで、「できた・できない」が明確になり、昨年度よりも評価が下がったという結果になった。読書の日の設定や親子読書、公共施設の図書利用、目標の設定など、様々な手立てを講じると同時に、保護者との連携を強化するなど家庭読書の習慣化を図る。					
		授業が分かっているのはよいことで、教職員の努力の成果である。家庭学習も個別に出すなど、よく考えて宿題を与えている。読書については、学校での取組は充実しているが、今後町内の環境が整備されるとよい。読書は家庭や学校だけで身に付くものではない。本を読みたいという気持ちを大切に、すき間時間にも少しずつ読めるようにしていきたい。				授業中に理解できていない児童が、「分からない」と言えるようになってきた。これにより、グループやペアで教え合いをさせたり、教職員が個別に指導したりすることができている。つまり、郡教育研究会発表大会に向けて取り組んだことが、大きな成果となって表れている。今後も継続して深い学びにつながる授業づくりに努める。家庭学習においても、決められた時間は取り組めるよう宿題の量を適切に配分していく。読書については、今までの取組を継続して行うとともに、学級や学年、全校での目標を周知し、習慣化を図りたい。					

3 強い子

健やかな体を育てることに努める	指標⑦ 「早寝・早起き・朝ごはん」ができていますか。 目標値 児童・保護者の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	B	◇食育の研究は昨年度で終わったが、各学級で食育に関する指導は継続して行われている。また、調理実習後やぎょしよく推進事業後には食育だよりを配信し、保護者への啓発を続けてきたため、B判定が維持されている。一方、すくすくカードの記入により、自分の生活を振り返り改善しようと考えている児童や、子どもの生活を変える必要があると感じている保護者もいるが、すぐに改善できない家庭環境や児童の実態があることも分かってきた。 ◆引き続き、児童に早寝・早起き・朝ごはんの大切さについて根気強く指導していく。食育だより・保健だよりを通して、生活を改善するヒントを啓発し続ける中で自分にあった改善方法を見付けてもらえるように発信していきたい。	児童アンケート⑨	86	58	28	11	3
		年度末	B	◇定期的な保健だより及び食育だよりの発行や、各学年で行われている食に関する指導の継続的な実施により、B判定を維持している。また、2学期からはノーメディアデーとして、月に1回テレビやゲーム、スマートフォンなどを利用しない日を設けた。課題の見られる児童がいるものの、家族ぐるみで規則正しい生活を送ろうとしていることも把握できた。 ◆冬休みは生活リズムが崩れがちになるが、保護者の協力を仰ぎながら規則正しい生活習慣の育成に努める。また、引き続き、食育だより・保健だよりを発行し、生活を改善するヒントを周知するとともに、保護者との連携を図りながら指導に当たる。	児童アンケート⑨	87	51	36	11	2
	指標⑧ 外で元気に遊んでいるか。 目標値 児童・地域住民の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	B	◇児童の約70%が肯定しており、B判定である。4・5月は、異学年で外で遊ぶ姿を多く見掛けたが、梅雨時期から7月になると暑さもあり、室内で過ごす児童が多くなった。その原因としては、児童の体調面も考慮して積極的に外遊びを推奨できなかったことが考えられる。放課後の水泳に関しては、昨年度の倍以上の児童が参加するなど、運動に親しもうとする児童が増えてきている。 ◆2学期以降は、熱中症への対策も考えて外遊びを行えるように声を掛けることが必要である。また、児童会を中心に学級全体で遊ぶ機会を工夫するなど、運動の習慣化を図る。	児童アンケート⑩	71	45	26	20	9
		年度末	B	◇中間期と比べて大きな変化はないが、昼休みに学級や学年で企画した遊びを楽しんでいる姿が多く見られた。また、陸上練習には多くの児童が参加し、積極的に体力を向上させようとしていた。反面、教室で過ごす児童も見られ、運動の二極化傾向にあることも否めない。 ◆引き続き、児童会や学級・学年で遊びを企画し、運動の習慣化を図る。3学期はマラソンチャレンジデーが計画されている。児童全員がで意欲的に取り組めるよう校内の体制を整え、健やかな心と体づくりに努める。	児童アンケート⑩	71	41	30	21	8
学校関係者評価委員の意見	早寝早起きは、スマートフォンやゲームなどの管理が一番のネックになっていると思われる。これは、家庭における娯楽の制限やそれを得るために必要なことを達成するなど、家庭でのルールづくりが必要である。家庭の生活スタイルも多様になっているが、健やかな体を育てるためには、生活リズムを整えることが重要になってくる。 地域で外遊びをしている児童を見かけない。しかし、自分の体に関心を持ち、体力づくりに励むことは大切である。熱中症等の心配もあるが、配慮しながら強い子の育成に取り組んでほしい。また、地域行事にも積極的に参加する児童の育成に取り組んでほしい。		学校の対応	「すくすくカード」を継続し、児童に自分の家庭生活を振り返らせるなど、よりよい改善策について考えさせる。また、規則正しい生活を送ることの重要性を説いた食育だよりや保健だよりを定期的に発行し、よりよい生活の仕方について保護者へ啓発する。帰宅するとゲームやスマートフォンを使用する児童が多いことから、保護者と一緒にルールづくりを考えさせるなど、家族ぐるみでの家庭生活の見直しを図る。 1学期末は、熱中症や感染症の対策を余儀なくされたが、それらを考慮しながら学級や児童会を中心に外遊びを推奨していく。放課後の陸上練習には多くの希望者があり、体力の向上に対して前向きな児童が増えている。また、地域の催しも多く予定されている。これらに進んで参加できるよう声掛けを行うなど、運動に親しめる環境を整えていく。						
	休み時間には、運動場で遊ぶ姿が見られる。集団の力を活動して、社会性を身に付けながら健やかな体づくりに努めてほしい。外遊びではないが、盆踊りや神輿など地域行事に参加する児童が増えてきた。 食は健康の基本である。朝ご飯を食べていない児童は元気もない。つまり、家庭への働き掛けが重要で、食育だよりや保健だよりを通じて、元気な児童の育成に努めてほしい。			前期同様に「すくすくカード」を継続して実施し、親子で家庭での生活を振り返り、改善策について考えさせる。特に配慮を要する児童については、規則正しい生活を送ることの大切さについて個別に指導する。また、学級の給食指導で、「食べること」は生きていく上で一番重要であることを伝え強い体づくりに努めさせる。さらに、定期的に食育だよりや保健だよりを発行し、家庭への啓発や協力依頼を行う。 縦割り班や学級で行う外遊びはほぼ全員が楽しんでいるが、休み時間に教室に残っている児童もいる。マラソンチャレンジデーを核として、体を動かすことよさや感染症に負けない強い体づくりについて指導していく。						

4 生徒指導

生徒指導の徹底と健全育成に努める	指標⑨ 楽しく学校生活を送っているか。 目標値 児童・保護者の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	A	◇児童、保護者ともに100%に近い評価になった。これは、日常的な教科指導に加えて、児童会活動や学級・学年での取組が実化したことが要因となっている。また、今年度改善したホームページを見た保護者が、「学校での様子がよく分かる。」と多数コメントしており、結果として表れている。一方で「学校に行くことを苦痛に感じている」児童や、学校生活に慣れずに「楽しくなかった」と感じている児童もあり、危機意識を持って健全育成に努める必要がある。 ◆町内の小規模校と比べると、児童一人一人と深く向き合う時間の確保が難しい。しかし、教職員が多く、たくさんの目で児童を見ることができるという利点もある。引き続き、アンケートや教育相談等を活用して、小さなサインに気が付けるように教諭一人一人がアンテナの感度を挙げて児童に接する。また、教職員間の情報交換を密にし、同一歩調で指導に当たる。	児童アンケート⑪	97	67	30	3	0
		年度末	A	◇中間期と比べて、ほぼ同じポイントでA判定である。学校行事などに楽しみながら取り組んでいる様子から、これらの日々の取組が結果に表れていると思われる。一方で、「とてもそう思う」のポイントが減って「だいたいそう思う」が増え、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」のポイントが上昇していることから、引き続き危機意識を持って指導に当たる必要がある。 ◆継続して学級担任によるきめ細やかな教育相談等を行う。そこから得た情報を職員朝会や「児童を見つめる会」で共有し、同一歩調で指導に当たっていく。また、多くの教職員の目で、児童を見ていく。	児童アンケート⑪	96	59	37	3	1
学校関係者評価委員の意見	多くの児童が「学校は楽しい」と感じており、よい傾向にある。感想からは、楽しいだけでなく、苦しいことやつらいことを乗り越える喜びを感じている児童も多いように感じた。児童の思いを把握するためには教育相談が有効である。相談の方法は多様にあるが、定期的実施し児童の心の声を汲み取ってほしい。 ほぼ全員が楽しく学校生活を送れているが、マイナス意見の児童への対応が重要である。学校生活に対して不安に思っている児童に目を向けてほしい。教職員と親しい児童は何でも言えるが、そうでない児童もいる。特に児童の本音を見抜く力が求められる。児童の朝の表情も含めて、観察指導をしっかりと行ってほしい。	学校の対応	1学期に実施した教育相談は、網羅するのに時間がかかったが、全教員で全児童に対応することができ、児童にとっても教職員にとっても有意義な時間となった。引き続き、教育相談を充実させ児童の心のつづやきを拾いたい。また、ホームページを見た保護者の多くが、「学校の様子がよく分かる」と感じており、関心を高めていることが伺える。引き続き、ホームページの更新を行い、日常的な様子を発信していく。 学校評価だけでなく、毎月行っている児童アンケートにも個別に対応しなければならない事案はある。引き続き、アンケートを基にした教育相談を充実させる。また、「児童を見つめる会」で教職員全体に周知し、同一歩調で指導に当たることができるよう体制を整える。保護者に対しては、引き続きホームページや学校だよりで教育活動を発信していくとともに、互いに情報を伝え合える関係づくりに努める。							

5 教職員

教職員の人間力・指導力・組織力の向上に努める	指標⑩ 研修の自己研鑽に努めているか。 目標値 教職員の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期	A	◇学校教育目標を踏まえた研究主題に基づいて、それぞれの立場で研究の推進に努めている。1学期は予定していた授業研究を確実に実行し、授業改善に生かすことができた。また、必要に応じて学年部等で話し合う機会を設け、各自の悩みや不安に組織的に対応できていることが、組織力や指導力の向上につながっている。 ◆「自己研鑽」の時間を確保することは難しいが、教職員一人一人が課題意識を持って日常の業務に取り組む必要がある。また、本校は教職員数が比較的多いため、ベテラン教職員に相談しやすい環境にある。個人が小さな悩みを抱え込むことなく、相談しやすい土壌を作り上げていきたい。	教職員アンケート⑤	100	39	61	0	0
		年度末	A	◇11月に郡教育研究会発表大会を開催し、3年間の研究の取組を披露することができた。参加者からは本校の取組を認められ、盛大に会を閉じることができた。これは、教職員一人一人が児童の力を伸ばすために真摯に研修に取り組んだ成果と言える。また、2学期に行われた運動会や学習発表会などの学校行事に対しても、教職員一人一人が真剣に児童と向き合って指導に当たり、よりよい成果を収めることができた。 ◆本校は、ベテランから若手まで年齢層が幅広いが、人数が他の学校と比べて多いため組織力に強みがある。児童に対する指導法については組織で対応できる。中間期に続き、個人が小さな悩みを抱え込むことなく相談しやすい土壌を作り上げていく。	教職員アンケート⑤	95	57	38	5	0
学校関係者評価委員の意見	教職員の過労が報道されているが、本校の先生方はよく頑張っている。やるが多すぎてストレスをためると、自然体で児童と接することができなくなるので、体調管理をしっかりとしてほしい。疲れることもあると思うが、研究や研修、児童と触れ合えることを喜びにして取り組んでほしい。 「学校が楽しい」「授業が分かる」など、児童にとって学校が充実した場になっている。これは、教職員が児童に真摯に向き合い、児童の成長に向けて努力している成果である。無理をせず、楽しみを見出しながら頑張してほしい。	学校の対応	各校務分掌の主任が中心となった学校を運営できている。研修面においても、一人一人が課題意識を持って取り組んでいるため、「自己研鑽」ができていく。2学期は、郡教育研究会発表大会の会場校になっている。これを機として研修を深く積み、本校の教育活動を最大限に披露したい。 11月に行われた郡教育研究会発表大会では、本校教育の取組を多くの教職員に披露することができた。また、来校者からは賞賛の声も聞かれた。また、どの教職員も児童の成長を楽しみ日々の教育活動に当たっている。自信を持つことは大切だが、これに満足することなく継続的に自己研鑽に努めたい。							